
推定妖精、白羽冬莉

雛月詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

推定妖精、白羽冬莉

【Zコード】

Z0877E

【作者名】

雛月詩音

【あらすじ】

いやなことがあってひとりになつた日、あたしのところに推定妖精な不思議ちゃん・白羽冬莉がやって來た。冬莉は妖精みたいなぽわぽわした笑顔で言う、「わたしと一緒に、死んでくれない?」

ガトーショコラ、ロールケーキ、ブルーベリータルト。

昨日あたしがまとめて食べてやろうとしたケーキたちの名前だ。ケーキ三つ、一気食い。三つ、一気だなんて……。考えただけでもよだれが出る。おそろしい。

わからながら、これはとんでもない暴挙だった。

なんでそんなことを、しようとしたかというと。

昨日学校であんまりいやなことがあったものだから（思い出したくもない）、やけ食いでもしてやるうつて思つたんだ。で、あたしはなげなしの千円札握り締めてお菓子屋に行つたというわけなのです。けどもね。

閉まつてやがった。

定休日だとお！？とか叫んでシャッター蹴り飛ばしたのは言つまでもない（うそだけど）。

ぶち切れたあたしは夕方五時から寝てやつた。ふて寝だ。目が覚めたら九時だつた。夕ご飯はなくなつてた。いやそれはいい、どうせ食欲はなかつたから……。

そんなことより夜眠れなくて死んだ。どんだけベッドの中でうだうだしたか分からない。寝付く頃にはもう外は明るくなつてた。あたしの目には隈ができた。

もちろん一晩寝て起きたくらいで気が晴れたりしないので、学校はサボつてしまつた。

しかもね。昨日から始まつてるんですよ……。最悪だ。

昨日から今日にかけて満身創痍になつたあたしは今、ここ 街外れの丘にいる。

ここはあたしだけのひみつの場所。見晴らしがよくて、明るい陽射しに照らされた街の風景が見渡せて、風が吹けば自然の花畠がざめいて、草の絨毯に寝つ転がるもし、なんとか倒れてる木に腰

掛けでぼーっとしてもよし、とつあえず一人でいるには一番いい感じの場所だと思ってる。

なのに、今日のあたしはため息をついたりなんかして。見上げる空は、青い。雲ひとつない。晴れている。いやにならぬくらい晴れた空。

ブルースカイ。

まじブルーだ。ブルーベリーよりもずっと、ずうっとブルーだ。
……はふう。あたしの心もブルースカイ。

あたしの足は勝手に一番奥、すなわち一番高い場所に向かつた。それから音を立てて、枝の隙間から漏れてくる陽の光が顔を撫でる。気持ちいい。でもそれくらいじゃあたしの心は晴れないのだった。丘の上に立つと、あたしはいきなり下を見た。けつこう急だ。落ちたら死にそうだ。

落ちたら痛いかなあ……とか物騒なこと考える。ありえんとか思つてゐる自分と、落ちたらどうなるだろ?と考えてる自分とでなんか頭の中が分裂してしまつたみたいだった。

はふう、とまた一つため息をつく。ため息ついたのははじつちの自分だつたやら。

いきなり、後ろから声がした。

「やつぱり、来てくれた」

あんまり驚いたから落つこむだつた。あたしは首がねじれそうな勢いで振り向いた。

ふわふわのわたあめみたいな声には、聞き覚えがあつた。
白羽冬莉。

推定妖精。

彼女はまったくいつものように、ふらふらとあたしのほうへやつて来る。そしてあたしから約四歩、白羽冬莉基準で五歩の距離置いて立ち止まると、ほんとうに妖精みたいなぼわぼわした笑顔でこう言つた。

「ねえ、わたしと一緒に死んでくれない?」

あつたかな風が吹いて、すこしだけ、くすぐるよつにあたしの頬を撫でていった。

さらりと……

花々がさやめいて、一瞬だけあたしに考える時間をくれた。そして初めに思ったことといえば、死ぬのはいやだとなんでそんなこと言うんだとか、そんな実際のことでは全然なくて、もつとふわふわとした つまり、

推定妖精少女でも「死ぬ」なんて口にするのだな、といつてだつた。

白羽冬莉は十三歳で中学一年生、四月一日生まれ。すなわち学年で一番年下。だからなのか、いや関係ないと思うけど、ものすっごくちいさい。セーラー服ぶかぶか。髪の色がやたらと薄くて（しかもナチュラルらしい）、長さは腰とかゆうに越えるくらいすさまじく長い。それなのに不潔な感じはぜんぜんしなくて、何かくん。いや、へんだというなら髪よりも彼女じたいがかなりへんだ。不思議ちやんというのか。

だいたいいつも眠そうな顔をしていて、半分目を閉じていて、ものすごく遠くを見るような目をしていて……遠くといつか、「ここではないどこか別の世界」に体の半分くらい奪われてこるよつな。左脳とか。右脳だけ？

肌なんかも異常にきれいだ。白い、ひたすらに白い。触つたらきっと滑る。あるいは溶ける。あたしの指と彼女の肌が一緒になつて溶けてしまつ、つまりアイスクリーム？ 雪見だいふくとか。白羽冬莉はそんなんかんじの儂げな少女だ。そしてとんでもない美少女でもある。前にテレビでいろんな人の顔混ぜて平均作ると超美人になるってやってたけど（実際にそつやつて作った顔がどんなだつたかは忘れた）、たぶんそれよりも白羽冬莉のほうがきれいだ。内緒だけど、たまにあたしは見とれている。

内緒と言いつつ本人はバレてたり。この間斜め後ろから彼女のこ

とを見ていたら、きなり振り向かれて目が合つた。ちなみにそのときはまつ毛に注目していたから、目が合つたときにふりゅふりゅと何か別の生き物みたいに可愛らしく見えるのがよく見えた。

そのとき白羽冬莉はこう言つた。ショートケーキみたいな満面の笑顔で。

גָּדוֹלָה?

「……何が？　ていうかどーに？　何で疑問形？　意味分からない
したつた一言なのにツツ「ミミ」といふが多すぎた。覗き見してたのが
バレて恥ずかしかったあたしはソツ「一目を逸らして外を見た。た
ぶん顔は真っ赤だつた。

「休みになると白羽冬莉はいなくなる。みんなお昼ごはんを食べてる中、ひとりこいつぜんと姿を消す白羽冬莉。お昼ごはんどうじろかもの食べるところじたい見たことないし、ぜつたいどっかで花の蜜とか吸つてるに違いない。……と信じたわけでもないけど、どこに行つてるんだと氣になつたあたしは探しに行つてみたことがある。寝てた。外。中庭の花畠の中。

春だつたしやたらといふ陽氣だつたし、気持ちは分かつた、といふかむしろあたしも同じことをしたいくらいだつた。ていうか本当に花の蜜かよ、いやちょーちょやミツバチと戯れているだけだ、それつてどっちにしても普通じゃなくね？ と我ながら怪しい脳内一人芝居を繰り広げながらあたしはじつとその様子を見た。だつてしまいなんだもの。

寝ているのをいいことにあたしは近くに寄つてしゃがみこんだ。スカートから伸びた自分と同じものとは思えないほどきれいな脚とか。花の上に散らばつた異様に細くて薄い髪の毛とか。ゆるく握つて無造作に投げ出された両手とか。半開きのくちびる。やわらかそくな類。寝息といつしょに上下するちいさな胸。

思いつきり花の真上に乗つかつてゐるけど、たぶん花は潰れてない。

たて白羽冬莉 まるで妖精みたいだ。ものと、このときあたしは思った。白羽冬莉は妖精。だけど、証拠が

ない。

といふことは、推定妖精だ。

推定妖精少女である白羽冬莉とは、でも、あたしは友だちとかではなかつた。なぜだか話しかけてみる勇氣が出なくて、遠くで見てるだけでいいみたいな気持ちだつた。べつに白羽冬莉と仲がいい誰がいて、その子に遠慮してたとかそういうわけでもない。彼女はいつもひとりだつた。

ほんとうにいつも、ひとりだつた。

そんな白羽冬莉と、今あたしは一人ぼつか。

「どうか、何かとてもたいへんなことを言われた気がする。いまこのひとと一緒に死んでって言ったよね？」

「どういう意味？ 言葉通り？ ……じゃないよね。妖精語？ 死ぬって妖精語で遊ぼうって言われてるとか。知らないけど。『死か死ぬとか言うなよ』推定妖精の癖に。」

あたしはぞぞかしあ間抜けな顔をしていたに違いない。半分笑つたみたいな、どうしていいか分からないときの顔だ。

冬莉は本気なのかどうかわからない。というより、本気には見えない。なぜなら彼女は今、ショートケーキみたいな笑顔を浮かべているから。微笑みながら心中を持ちかけるなんて想像できないし。意味不明。

混乱のせいなのか何なのか、あたしの口から意思とは関係なく声が出了。

「しらはね……ふゆり」

なんで名前なんだよ。意味不明なのはこっちも同じだった。でも呼ばれた当の本人は、まるでそれが正しい答えだつたみたいにとつても嬉しそうな笑顔でうん、と答えてくれた。あたしの胸がむやみにあつたかくなる。きれいな笑顔だ。

「さくらゆか！」

じきりとする。白羽冬莉の口からあたしの名前。お返しつて」と？
あたしはなんだか焦った。

「な……なにしに来たのさ。こんなとこに」

ついこちくんなよみたいな台詞を口走つてしまつ。別にそんなこと聞いたかつたわけじゃないのに。

「ゆかにこそこそ、なんでここに来たの？」

彼女は笑つたまま、質問に質問で返す。

なんで、つて。

……いやなことが、あつたからだよ。

きゅっと胸が締まつた。ぐつと言葉に詰まつたあたしを、冬莉は微笑んで見ている。まるで何もかも見透かしてゐみたいに。

居心地が悪くて、あたしは視線を逸らした。

「……あたしのことはいいでしょ、別に。先に質問したのはこいつちだつて」

「ゆかこに念いに」

不思議ちゃんめ。どうしてあたしがここにこりうつて知つてんのよ。

「ゆかこなら、来てくれるつて思つてた」

ちなみに呼ばれた覚えはこれっぽつちもない。あたしが今日こじに来たのは完全にあたしの意思で、冬莉と会つたのはただの偶然だ。しかし、一体どう答えたらいいんだ。冬莉が電波なので分からぬい。冬莉とあたしの周波数だか波長だかは残念ながら、ズレているようだ。

黙つていたら冬莉のほうが話を続けた。とんでもないことを言つ。「ゆかこ今、死にたいなあつて思つてたでしょ？」

「はあ？」

思つてなかつた。……こともないけど。

「じつと下を見て……きゅっと手を握り締めて……少しおぼつかつていて、わたしが來たのも分からぬいくらいに。あしがちょっと、ふるえてた」

ショートケーキの笑顔がザッハトルテ（生クリーム抜き）になつた氣がした。

「やなこと、あつたもんね」
血の氣が引いた。

なんで知つてんだ。

あのとき冬莉はいなかつた。誰かから聞いたつてこともありえない、なぜなら冬莉はいつもひとりだから。
まさか。

いや、そんなはず。だって妖精なんだよ？ ありえない。でも……
知らないはずなのに知ってるってことは、つまり。

「やつたのは、わたし」

……まじで？

耳を疑うことはこのことだ。でも、やつた。確かに。冬莉は直前までは、いた。

昨日の体育の時間の後、着替えてるとき、クラスの一人が騒ぎ出した。何かが無くなつたって。その子にとつてはひどく大切なものがしかつたけど、何だつたのかは忘れた。どうでもいい。

問題なのは、あたしが濡れ衣を着せられたってことだ。

あたしはそのとき生理痛がひどくて保健室に行つてた。あたしの他に休んでたのは白羽冬莉だけだった。だから自動的に、あたしが犯人つてことになつた。

……実際何言われたとかどういう空気になつたとかは、ほんと、思い出したくない。ちょっと吐きそ�。

冬莉は体育が終わつた頃にはもう学校からいなくなつてた。それ以前に誰も冬莉がやつたなんて疑いもしてなかつただろう。推定妖精がこの世のかたちあるものに興味を持つなんて想像つかない。

でも、さつきの言葉が本当だとすれば、盗みを働いたのは……真犯人は、白羽冬莉。

「……なんでそんなこと、したの」

言いながら、あたしはあれおかしいな、と思つていた。もつと怒つてもいいはずだ。白羽冬莉のせいでの気持ち悪くなるくらいやな思いしたつていうのに、なんで？

「ゆかこはいま、ここにいる」

「……そうだね」

見りや分かる。それがどうしたつていつのせ。てゆうか質問に答えようよ……。

「わたしが、やつたから」

「……そうだね。白羽がやつたことで、あたしはいやな思いして、

「ここに来る羽田になつた」

あたしがそう言つと、冬莉は本当にうれしそうに、大きくうんと頷いた。

「それが、理由」

……はあ？

いまいちよく分からぬけど、つまり、「ひじり」と？
白羽冬莉はあたしをこの場所に呼ぶために盗みを働いて、あたしにいやな思いをさせた。

うそでしょ？

「あたしに」会いたかったの？ って聞きかけて、何か恥ずかしくてやめた。「……何か用があつたの？」

冬莉は頷く。まだ、ザツハトルテみたいな笑顔。

「だつたら普通に呼べばいいじゃん……。なんであんな、……遠まわしなこと

「テストだったの」

「テスト？」何の？

「わたしと一緒に行つてくれるがどうか、ってこうテスト。ゆかこは合格」

合格らしい。

「……それはどうも」

この推定妖精少女の言つこととにかくつけていくのは本当にいたいへんなんだけど、こいつのことですか？

いやな思いをして、ここに来たら合格。推定妖精と心中（……証拠がないから推定心中だけど）する権利がもらえます。……理解できねー。

でも。でもね。

実を言つと、あたしは、結構……

「なんで」

結構、嬉しかつたり、していた。

「なんで、あたしなのよ……」

「わたしのこと、見ててくれたし」

「うわ。そんなこと言われたら。

ハートを突き刺されたみたいな気がした。バレてるって分かって

はいたけど、言うタイミングが悪い。

そう、あたしは嬉しかった。冬莉に選んでもらえて、うれしかつたんだ。

あたしは冬莉に憧れていたから。

雪見だいふくみたいな肌の、わたあめみたいな声の、ショートケイキあるいはザツハトルテのような笑顔の……ぽわぽわした白羽冬莉に、どこまでも普通人のあたしはとつても憧れていたのだ。

あたしは推定妖精、白羽冬莉みたいになりたかった。

その憧れの推定妖精少女に合格、と言つてもらえて、あたしはすごく嬉しかった。でも。

「ゆかこなら来てくれるって、思つてた」

「そ、そつ」

確かにあたしは嬉しかった。けど、それとセシトになつてゐ持ちがあるんだ。

不安。

こんなに普通なあたしを、どうして冬莉は選んだんだろう。何かの間違いじゃないの？ そつこつ気持ちが、どうしても拭いきれない。

「……あたしで、いいわけ？」

「うん」

「あたしはこんなに普通なのに？」

名前だって普通だし。佐倉結花子。白羽冬莉に比べたら全然ふつうすぎて泣けるくらい。

冬莉の返事は予想外だった。

「ふつうつなに？」

あたしはすぐに返事できない。

「ふ、ふつうつていつのは」

なぜか必死で、あたしは考えた。

「ふつうつてこりのば、…… 多数派つてことだよ。みんなと一緒になの。マジコリティーつてやつ？」

「今こじこみてよ、わたしとゆかこ一人しかいないよ？」

「そりゃそうだけど。

「今こじこ多数派は学校で授業受けてるよ。ねむくてつまらない、何の役に立つのか分からぬ、そんなことのために集まつてえんえん時間を潰してる……」

冬莉の吐く毒があたしの体に染み透る。この子つてこんなことも言つんだな……。

「わたしたちは、違う。ふつうじやない
そう言つと冬莉は一步を踏み出した。一歩。二歩。あつとこり間に距離を詰めてくる。

得体のしれない威圧感を覚えたあたしは、無意識のつまご一歩下がろうとして後ろが崖なのを思い出した。
冬莉はもつ田の前だ。

「一緒にいくの?」

冬莉の手があたしの手を掴んだ。「んつ……」口から勝手に声が漏れる。異様に冷たい手だった。雪見だいふくだから当然といえば当然なのかも……なんだか繋がった手から冬莉の心臓の鼓動が伝わってくる気が　いや、これはあたしのか？　冷たくて温かい、へんな気もち。

気付けばくちびるが触れそうなほど近くに冬莉の顔があった。あたしの視界は、冬莉だけ。

囁き声が頬をなせる。

「……わたしと一緒に、死んでくれるよね？」

「じきじきしおきて田をつむりたくなる。つむつた。首がすくむ。冬莉近づき。息かかる。ハーブティみたいにいい匂い。花の香り。繋いだ手だけがおかしなくらい冷たくて、からうじてあたしの理性を繋ぎ止めてくれている。

あたしもかかれる声で囁いた。

「死ぬ、ってなに。どういう意味」

「そのまんま。……たとえばそこから飛び降りて、一人で一緒にどこか遠いところに行くの」

冬莉が見てた『ここではない、どこか別の世界』は、死後の世界だった……？

まじで？　本当に心中？

「二人でだったら、こわくないよ。なんとかって言つとね」

冬莉はいまどんな顔をしているんだろう。

「ひとりで死ぬひとは、これから自分が向かう未来、死ぬっていうことを真っ直ぐ見てないといけない。だけど一人でいれば、未来じゃなくてももうひとりの相手を見ていふことができる。死ぬことから田を背けて、一緒にいるひとのことを考えて、いつのまにか死んじ

やえる」

言つてることば、ほとんど分からなかつた。

「だからこわくないよ。一人なら」「

実際に死ぬのかどうかはともかくとして、冬莉は本気みたいだ。
冗談とかではない。冬莉的に本気なのだ。だから聞いた。

「……白羽は、死にたいわけ？」

「つうん。わたしはどこか、違うところに行きたいだけ」「

「じゃあなんで死ぬなんていうのわ」

「どいか違うところなんて、このせかいのどにもないから」「

一瞬だけ声色が変わった気がした。苦い薬の味。

「……なんで、違うところに行きたいなんて」

もうとつぐに行つてる氣がしてたけど。

だけど、冬莉自身は、ぜんぜんまったくそは思つてなかつたみたいだ。

「ここに、わたしの居場所はないの」

冬莉は 笑っていた。

でもそれはもう、ショートケーキでもザッハトルテでもなかつた。
何か苦々しい、見ていると切なくなるような……あたしには、例え
ようがなかつた。

「わたしは、変。ゆかこなら分かるでしょう?」

……自覚、あつたんだね。

「わたしはわたしを変えてせかいのかたちに合わせるか、せかいを
変えてわたしのかたちに合わせないといけない。でも、どちらも無
理。わたしは変すぎた。ここはわたしのいるべきせかいじゃない……

……

冬莉はか細い声をすこしだけ震わせながら、切々と、自分の居場
所はここじやないと訴えた。

それはあたしの中の白羽冬莉像が粉々になつた瞬間だった。

彼女は誰にも縛られずにいつもひとり、自由でふわふわな美少女
で、よく分からぬ不思議ちゃんの推定妖精

なんかでは、ぜんぜん、なかつたのだ。

白羽冬莉は妖精ではなくて、

あたしと同じ、悩める中一の女の子。でも。

「だから、ゆか」「……」

「でもね？」

「一緒に、死のうよ」

「一緒に死ぬとか。どうなのよ。

あたしは考えた。真面目に考えた。冬莉と一緒に死ねるか？
確かに生きるのはつらい。ちょっとしたことで昨日まで仲良さげ
にしてた友だちが、吐きそうにならないくらい酷い言葉をかけてくる。あ
たしがクラスの中で一生懸命必死になつて築いて笑つていられたあ
の場所は、じつはミルフィーユのパイ生地一枚よりも薄くて壊れや
すいものだったのかもしれない。それを壊さないよう、壊さない
ように、大切にしながら生きていくのはとてもたいへんで、疲れて、
ストレスで胃に穴が空きそうなこと……つい、昨日のこととて思う
よくなつた。ふて寝の余波で眠れないベッドの中、そんな暗い
ことをぐるぐる考えてた。

死ねばそんなの関係ないし、確かに楽になれそうだ。

あたしはそれはもう真面目に考えた。

ふだんまったく使わない頭を酷使した。

そしてようやく、答えを出した。

それを冬莉に伝える。

掴まれた手は相変わらずやたらと冷たくて、なんだか妙に緊張し
た。告白されるつてこんな感じなのか。返事をするつていうのはた
いへんなことだ。

でも言わなきや。

それが多分、冬莉に対する礼儀といつやつだ。

「ごめん」

あたしはゆっくりと、繋いだ手をほどいた。

「……だって、死ぬの、怖いし」

冬莉の笑顔がついに完全に壊れて、『コレート前のスponジみた』になつた。

「……ごめん」

いたたまれなくなつてもう一度謝る。
でも、言つたことは本心だ。それはそうだ。どれだけいやなことがあつても、ふて寝したせいで夕ご飯食いつぱぐれても、そのせいで夜眠れなくなつて隈ができても、やけ食いのために振り上げた千円札の下ろしどころがなくなつてしまつても……怖いものは、やっぱり怖い。冬莉的には一人なら怖くないらしいけど、それはうそだ。二人だろうが百人だろうが怖いに決まつてる。だつて痛そうだし……。

冬莉は濡れてしほんだわたあめのよつな声で言つた。

「ゆかこなら分かつてくれるつて信じてたのに……」

「ごめん。今度は心の中だけで、またあたしは謝つた。

冬莉は一步、二歩、下がつた。少し泣きそうにも見えた。気のせいかもしれないけど。

次に彼女が言つた言葉は、あたしの心を深く抉つた。

「わたしはゆかこみたいになりたかつた」

あたしは冬莉みたいになりたかつた。

なぜだかとも、泣きたくなつた。盗みの犯人扱いされたときにも大して悲しくなかつたのに、冬莉のこの一言、たつた一言がどうも、あたしの中のデリケートな部分をド真ん中で撃ち抜いたようだつた。

でも泣かない。

我慢した。

それはだめだと、あたしの中の何かが強く訴えたから。
まばたきもしないであたしは耐えた。唇を強く噛んで。こぶしを強く握つて。

冬莉はゆっくりと踵を返すと、去つていつた。

あたしは一人になつた。

ようやく力が抜けて、目を閉じる。たまっていた涙が一粒こぼれて地面に落ちた。

雨が降ってきた。妙に温かい雨。見上げても雲なんかひとつもない。不思議な雨だ。

それはすぐ、やんだ。

後に残つたのは、澄んできれいなブルースカイ。

次の日、あたしは何とか頑張つて登校した。べつにちゃんと学校行かなきやとか思ったわけじゃなくて、冬莉のことが気になつたらだつた。まさか一人で死んでたりしないかなと、不安になつたのだ。

冬莉はいつものように机について、半分閉じた目でこゝではないどこか別の世界、彼女自身がいるべき世界を見つめていた。

あまりにもいつもどおりすぎて拍子抜けしたくらいだ。

あたしは自分の席、冬莉の斜め後ろに座つて、じつと彼女の後ろ姿を見つめた。いつかみたいに振り向いて、笑顔でよつこそ?とかなんとか、言つて欲しかつたのかもしれない。

でも、どれだけ見つめても……

冬莉は一度も、振り向いてはくれなかつた。

お昼頃には明らかに無視されてるんだなつて分かつて、ちょっと悲しかつた。いやちょっとどころじゃない、かなり悲しかつた。せつかくのお誘いを（それが心中であるにしても）断つちゃつたのだから仕方ないのかもしれない。でも悲しいものは悲しい。

最後の授業が終わる頃、あたしの頭にふと、こんな考えが浮かんだ。

冬莉の中では、あたしは、死んだ人になつたのかもしれない。死んだら見えない。視線だつて感じない。だから振り向かない。

冬莉の不思議な頭の中身がどうなつてるかなんてあたしには分からぬけど、それはもしかしたら、冬莉なりの心の守り方なのかもしない。……あたしが断つたのがショックだつたっていうのが、

あたしの自意識過剰でなければだけ。でもたぶん、そんなに間違つてない。

わたしはゆかこみたいになりたかった　あの言葉は、いつたいどういう意味だつたんだろう。

あたしは自称ふつうの中一女子。冬莉に田をつかうるへりこにはへんらしいけど……。

そんなあたしのじいが、冬莉はこいと思つたのか。
よくわからな。

でも、こう思つのだ。ふつう、あのひとみたいになりたつて思つたら、そのひとと仲良くなつたつて思つんぢやないか……つて。
冬莉はふつうぢやない。けど、冬莉だつてやつぱり悩める中一の女子だ。あたしと少しふりこせ、おんなじといひがあつたつておかしくない。

あたしは冬莉が好きだ。不思議で自由な女子。あの子みたいになりたかつた。今までは勇氣とかそういうのが足りなくて、それに冬莉は遠い存在みたいに思えてたから、ずっと見てるだけでいいと思つてたけど……。

仲良くしたいんだ、本当は。
きつと冬莉も同じだ。

それに、いつもひとりで、しかもこの世界が自分の居場所じやないとか思つていて……それつて、寂しこじやないのかなあと想う。

だから……。

あたしは席を立つた。そしてじいをする胸を押さえながら、一歩ずつ冬莉のところに歩いていく。

そしてありつたけの勇気を振り絞つて、名前を呼んだ。

「冬莉」

雪見だいふくみみたいなきれいな顔が、ゆづくつといひを向く。
そこに浮かんでいる表情がどんなものか、人生で最高に緊張しながら、あたしは待つた。

3 (後書き)

あとがわ。

「」まで読んでくれた方、ありがとうございます。

甘くて苦い、そんなお菓子が食べたいなあ……そんなかんじです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0877e/>

推定妖精、白羽冬莉

2010年10月8日15時18分発行